

紀 要

地震考古学の発展に向けて濱 修 (1)

滋賀県竜王町堤ヶ谷遺跡出土の土偶形容器と石器について
.....中村 健二 (8)

弥生時代前期～中期の土器観察覚え書き
—針江浜遺跡と長命寺湖底遺跡の弥生土器—.....小竹森直子 (14)

古代近江における職能漁民の動向
—松原内湖遺跡出土の刺網系漁網錘の分析から—.....大沼 芳幸 (21)

滋賀県大津市国分所在礎石「へそ石」の周辺
.....小松 葉子 (31)

近江国野洲・甲賀郡境をめぐる一考察
—大山川流域の条里地割を手がかりとして—.....辻川 哲朗 (44)

天井川の生い立ちを考える その3
—天井川と埋没河川との関係について—.....重田 勉 (52)

比良山系の山寺
—大津市歓喜寺遺跡について—.....小林 祐季 (57)

明治山と旅順
—乃木希典を求める人々—.....松室 孝樹 (60)

25

明治山と旅順 — 乃木希典を求める人々 —

松 室 孝 樹

1. はじめに

本稿は長浜市の港湾部に残る一基の戦争記念碑について紹介するとともに、近代日本人が抱いていた乃木希典（嘉永2（1849）年～大正元（1912）年）に対する感情について、記念碑を素材としてアプローチを試みる小論である。

乃木希典（以下、乃木と略す）については、日露戦争の激戦地である旅順攻略をめぐる評価、明治天皇の大喪時における殉死への評価等、当時から多くの論評がなされてきており、それは現在もなお続く（大濱2010・佐々木2005等）。乃木の人物評価については本稿の課題でないので触れないが、肯定的・否定的のいずれに関わらず、乃木は日露戦争を象徴する存在であり、人々は彼の死後10余年が経過した段階においても、彼を日露戦争の象徴として、ひいては日露戦争で戦死した兵士（軍人）への鎮魂の象徴として存在していたのではないかということが、今回紹介する記念碑から窺うことができるのである。

2. 明治山旌忠（せいちゅう）塔について

今回紹介する明治山旌忠塔とは、長浜市の湖岸部、大島町に所在する戦争記念碑である。径約15m・高さ約3mに盛り上げられた小丘上にその戦争記念碑は建てられている（写真1～9）。

記念碑の高さは5m以上で三段構成になっており、下二段に石製の台座を、そして銅製の砲弾に擬した上段が聳えている。かつては上段の頂部に鳳凰をデザインしたオブジェが聳えていたが、現在は欠失している⁽¹⁾。そして上段の正面には「旌忠」と乃木の揮毫が浮き彫りにされ、両側面には鳳凰のデザインが、これも浮き彫りされている。中段は立方体の四隅に円柱を置き、その上部に土饅頭を載せたようなデザインである。背面を除く各面に銅板レリーフ

を嵌め込んでおり、円柱には天女、正面には蓮花を浮き彫りにしたレリーフが、左右側面には建立の由来等が記されたレリーフが嵌め込まれている。背面には装飾は施されていないが、台座内に入りが可能なように扉が設えてある。内部には戦没者1300余名の氏名及び戦没年月日・場所等が刻まれた真鍮製の芳名板が納められているとのことである（滋賀県護国神社1997）。なお下段は高さ1.3m、幅3.9m四方の台座で、表面を平滑に仕上げている他は装飾等は施されていない。

このように本事例は、県内に残る他の戦争記念碑と比較して装飾性が顕著である。戦争記念碑の建立主体は地元在郷軍人会分会である場合が大半であるが、軍・行政からの金銭的補助はなく分会の独自事業であったことから、大半の戦争記念碑は石製の方柱尖頭型の碑本体・台座・これらを囲む基壇等といった簡素なデザインで構成されており、装飾を伴うものは県内事例では少ない。

戦争記念碑のデザインについては、各分会の経済状況・建立時の世情等、複合的に判断していかなければいけないが、本事例については明治山が当時隣接していた長浜港の浚渫残土で築山したといわれており、その浚渫は長浜町出身の実業家である浅見又蔵の主導によって行われていることから、旌忠塔建立にあたって浅見家の財政的支援があった可能性も考慮しておく必要がある。

台座側面に嵌め込まれたレリーフの銘文は、滋賀郡上坂本村（現大津市坂本）に所在する官幣大社日吉神社の宮司、笠井喬によるもの。左側面にはこの塔の由来が記されている。

「大正十二年三月建
其旌忠二大字則集
乃木將軍遺墨也
帝國在郷軍人会
長濱町分会」

大正12（1923）年3月（おそらく陸軍記念日の3月10日だろう）に在郷軍人会長浜町分会によって建てられたこの塔の揮毫は、乃木の遺墨を使用している旨が記されている。

右側面には、
「旌忠碑銘
膽岳魏二琶湖洋二
功與山聳名與水長
從五位笠井喬題」

と讃が記されている。これらの題文等を記した笠井喬（文久3（1863）年～昭和6（1931）年）は膳所藩出身で滋賀



写真1 明治山旌忠塔全景



写真2 旌忠塔近景



写真3 塔正面



写真4 上段右側面レリーフ



写真5 中段正面レリーフ



写真6 左側面円柱レリーフ及び背面扉



写真7 右側面円柱レリーフ及び右側面碑文

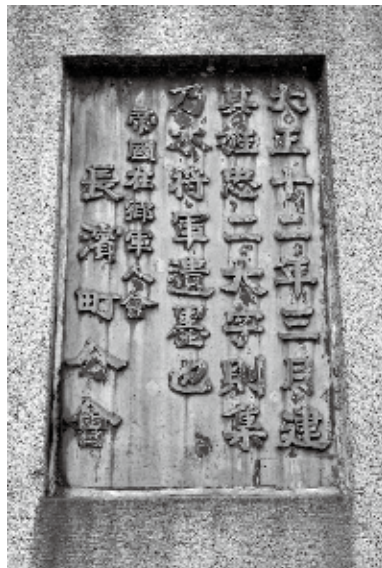


写真8 左側面碑文レリーフ



写真9 中段右側面碑文レリーフ

※ 方向の表示は碑に向って「正面・背面・左側面・右側面」と表示。

県庁の官吏として勤めた後、建部神社宮司等を経て官幣大社日吉神社の宮司となった人物である。日吉神社宮司の前任者であった伊藤紀と同じような経歴を辿った人物で、書記として勤め始めたのち神社行政等にも携わっており、また能書家として県内各地に彼らの揮毫が残る⁽²⁾。

以上が明治山旌忠塔の概要であるが、乃木については周知の通り、明治天皇の大喪礼があった大正元（1923）年9月13日に自刃しており、旌忠塔が建てられた大正12（1923）年の段階で敢えて遺墨を使用した理由はどこにも記されていない。また、オリジナルの揮毫がどこに所在するのか、それとの関連はどのようなものであったか、などといった疑問も残る。

ここではそれらの疑問を解き明かしていきたいが、その前に明治山旌忠塔周辺の景観について概観しておこう。それこそが、この問題を解く鍵となるかもしれないのである。

3. 明治山旌忠塔とその周辺の景観

現在、J R長浜駅の西側には湖周道路（県道2号）が走り、さらにその西側には長浜城を模した博物館を始め、長浜城跡地一帯は豊公園という名称で都市公園となっている。現在の長浜港周辺は昭和40年代からの埋立地であり、もとは琵琶湖であった場所である（図1）。

明治山の約150m東方には、明治天皇の行在所として明治20（1887）年に建てられた慶雲館がある。行幸25周年を記念して明治45（1912）年に発刊された『行幸二十五年慶雲館建碑式記念写真帖』を見ると、慶雲館の西側、現在の県道とその周辺部分は琵琶湖であったことがわかる（写真10）。つまり、明治山の所在する場所は琵琶湖に突き出た半島状地形の先端部だったのである。さらに半島状地形の先端には小丘と鳥居があることから、おそらくこれが明治山に相当するものだと考えられる。

この部分については、明治22（1889）年に大津～長浜間の鉄道が開業するまでの代用として蒸気船が運航されていたが、大型蒸気船が航行できるよう明治16（1883）年

に慶雲館の西側に新しい港を造っている。港の浚渫に当たっては長浜町出身の実業家、浅見又蔵の関与があり、明治山は浚渫の際に出た残土で作られたといわれている。

このような経緯を鑑みると、明治山は当初から記念碑を建てるために築山されたものではなかったことは明らかであり、長浜築港の中心的人物であった浅見が浚渫の記念として残土を築いて小丘を造っていた可能性が考えられる。明治山の土地は大正10（1920）年12月と昭和18（1943）年3月に浅見又蔵から在郷軍人会長浜町分会に寄付されていることから（滋賀県護国神社1997）、戦争記念碑建立の話が上がったのは大正10年以前からであり、それに伴い明治山一帯を寄付したという時間的経過が想定できる。

4. 滋賀県下に残る乃木希典揮毫の戦争記念碑

ここでは視点を変え、滋賀県下に残る戦争記念碑のうち、



図1 明治27(1894)年当時の明治山とその周辺



写真10 明治45(1902)年当時の明治山（画面右側）

明治山と旅順（松室孝樹）

表 1

所 在 地 市 町		名 称	型式	建立年月日			当初の建立場所	建 立 者	揮毫者刻銘		備 考	
				年	月	日			肩 書	氏 名		
長 浜 市	富田町	明治三十七八年役忠魂碑	尖頭方柱型	明治	39	(1906)	4		竹生村	陸軍大将	乃木希典	背面に日清・日露戦争戦死者の氏名・戦死日・戦死場所の刻銘あり。
長 浜 市	北之郷町	忠魂碑	尖頭方柱型	明治	40	(1907)	10	旧草野村立尋常高等小学校校庭			乃木希典	戦後進駐軍による撤去命令により、当時の青年会を中心とする碑建立・慰霊行事執行目的に結成された洗心会によって現在地へ移築。
彦 根 市	賀田山町茂賀	忠魂碑	尖頭方柱型	明治	41	(1908)	3	茂賀山	在郷軍人会亀山村分会（亀山村尚武団）	陸軍大将	乃木希典	左側面に日露戦争戦死者の氏名を刻銘。右側面にも同様の刻銘があるが摩耗が顕著で判読不能。
大 津 市	下阪本四丁目	旌忠記念碑	板石	明治	43	(1910)	3	10	在郷軍人会？		乃木希典	本文記載。
東 近 江 市	竜田町	忠魂碑	尖頭方柱型	明治	43	(1910)	11		出征軍人一同・賛助員・在郷軍人外有志中		希典	
近江八幡市	円山町渡合	忠魂碑	円頭板石型	明治	43	(1910)	12	？		陸軍大将	乃木希典	円山町在住の西川嘉右衛門氏が日露戦争凱旋後、乃木大将に懇望して直筆の碑文を拝領し、島学区戦没者英霊を慰霊顕彰する。
彦 根 市	本庄町	忠魂碑	尖頭方柱型	明治	44	(1911)	3	10	稲枝小学校校庭	陸軍大将	乃木希典	S41稲枝地区遭族会と帰還軍人会が発起して、稲江中学校運動場南隣に移築したものを再移築。
米 原 市	高番	明治卅七八年戦役記念碑	板石	明治	44	(1911)	3		在郷軍人会？		希典	背面に出征軍人17名の氏名を刻銘。このうち戦死者は1名のみ（『改訂近江国坂田郡志』）。
長 浜 市	大島町	旌忠塔	砲弾型	大正	12	(1923)	3		帝國在郷軍人会長浜町分会	陸軍大将	乃木希典	本文記載。
守 山 市	幸津川町	忠魂碑	尖頭方柱型	大正	13	(1924)	7	中州小学校校庭		元帥伯爵	乃木希典	
彦 根 市	甘呂町東森	弔魂碑(忠魂碑)	尖頭方柱型	昭和	3	(1928)	10	甘呂町花田小学校校庭南角	在郷軍人会南青柳分会	陸軍大将	乃木希典	S21に現在地に移築。その際「忠」の字を「弔」に変えたものと思われる。建立当時は檜板の命札が塔内に納められていたが、移築時に遭族に返還された。



写真 11
下阪本旌忠紀年碑全景



写真 12（左）
背面全景
写真 13（右）
背面（部分）

乃木の揮毫が用いられているものについて概観しておきたい。

表1は滋賀県内に残る乃木揮毫の戦争記念碑の一覧である⁽³⁾。それぞれ異なる経緯で乃木に揮毫を依頼したのであるが、本稿との関連が窺われるものとして旧滋賀郡下阪本村（現大津市下阪本四丁目）に所在する「旌忠記念碑」をここでは取り上げたい⁽⁴⁾。

本事例は大津市立下阪本小学校西隣に所在しており、明治43（1910）年3月10日に建立されたことが背面の碑文から判る。自然石（片岩か）の表面を平滑に整えているが、背面については大半が剥落しているため碑文も大半が欠失しており情報に乏しい（写真11～13）。

正面には乃木の揮毫が刻銘されているが、この揮毫については膳所藩出身で思想家であった杉浦重剛（安政2（1855）年～大正13（1924）年）を介して乃木に揮毫を依頼したことが判っている（石川1985）。

背面の碑文については前述の通り剥落が進んでおり、碑文全体の状況は不明である。誰による題文か情報不足のため断定できないが、可能性として彦根藩出身で当代随一の書家であった日下部東作（鳴鶴、天保9（1838）年～大正11（1922）年）、もしくは建碑ときに官幣大社日吉神社の宮司であった伊藤紀、両者いずれかの可能性を指摘しておきたい。

次に正面の揮毫について明治山のそれと比較しよう（写

真14・15）。下阪本例は陰刻・明治山例は陽刻と異なり、さらに明治山に残る揮毫は間近では見えない距離にあるが、写真で両者を比較する限りでは筆致は酷似している（「希典書」も含めて）。同一人物の揮毫だから似て当たり前と言われればそれまでだが、文字のバランス等も観察する限り同一原本によるものとみて良さそうである。下阪本例の揮毫原本は、依頼主である杉浦の縁者（松本家）に渡ったということであり、それを基に明治山の揮毫も複写された可能性が高い。

ただし、これらはあくまでも推論であり、根拠は乏しい。明治山旌忠塔の建立に当たって、明治山の建立主体と下阪本の揮毫原本所有者との間で揮毫原本の貸し借りを示す文書が存在し、発見されれば上述の推論の正否が判明する問題であり、ことさら事大視する必然性もないかもしれない。ただし資料のない現状で推測するならば、明治山旌忠塔の概要を述べた際に登場した笠井喬が、下阪本村との結び付きが当然深いであろう日吉神社の宮司であること、杉浦重剛と同じく旧膳所藩出身であったということなどから両者の関係性を想定することは、あながち荒唐無稽な話ではないかもしれない。

5. なぜ明治山旌忠塔には乃木希典の揮毫が必要とされたのか

これまでに明治山旌忠塔の概略、揮毫のオリジナルの検



写真14 明治山旌忠塔揮毫



写真15 下阪本旌忠記念碑揮毫

索等の作業を行ってきた。最後に乃木の死後10余年経っても乃木の揮毫を使用するに至った必然性について考えてみたい。

先に見たように明治山の旌忠塔は、大正12（1923）年に在郷軍人会長浜分会によって建てられた。

『改訂近江国坂田郡志』によれば、旧長浜町域から日露戦争に出征した兵士のうち20名が戦病死している（滋賀県坂田郡教育会1942）。西南戦争では1名、日清戦争では戦病死者0名であったことを鑑みると、いかに日露戦争が近代日本人に与えた衝撃は大きかったものと推察される（西南戦争の戦没者は両軍併せて約13,200名・日清戦争の日本軍戦没者は約13,800名であったのに対し、日露戦争の日本軍戦没者は85,100名であり爆発的に増加している）。旌忠塔建立の主体者は在郷軍人会長浜町分会だが、建立当時の構成員の大半は日露戦争の体験者であり、いわば20名の戦没者達の戦友である。当然彼らも旅順攻略の激戦をくぐり抜けてきたわけであり、日露戦争後における忠魂碑等戦争記念碑の建碑が隆盛を迎え自分達も戦友達の慰霊・出征兵士である自分達も含めた顕彰を行うための空間、そしてモニュメントを造ろうと思いついた時、それにふさわしい空間として彼らの中には明治山が思い浮かんだのではないだろうか。

明治山が琵琶湖に突き出た半島状地形の先端部に位置していることは冒頭でも触れたが、日露戦争を体験した彼らにとってはこの地形こそが、自分達の生死を分けた旅順を想起させるものであったのではないかと考えたい。そして、当時すでに203高地・白玉山山頂には乃木・東郷平八郎らの発案によって、巨大な表忠塔が建設されていた。特に203高地に建てられた塔（爾霊山塔）の頂部は砲弾を模しており、正面には「爾霊山」と乃木の揮毫が刻まれている。明治山旌忠塔の上段も砲弾を模している点で、製作にあたって203高地のそれを参考にしてしている可能性も考慮しておく必要があろう⁽⁵⁾。

このように当時の状況を鑑みれば、戦争記念碑の建立が計画された段階で明治山一帯を旅順と見立て、そこに建てる記念碑の揮毫者は他の誰でもない、旅順攻略の司令官であり、この戦闘の象徴と目されていた乃木でなくてはならない、という意識が働いた可能性は高い。しかし乃木は既にこの世にはおらず、結果として遺墨を用いることとなったと推察される。残念ながら遺墨使用の経緯については不明であるが、結果として下阪本の旌忠記念碑の揮毫を複写して用いることになったと本稿では推察した。

6. おわりに

簡単ではあったが、一基の戦争記念碑が建てられる経緯を題材に、近代日本人が抱く乃木希典に対する感情がどのようなものであったのか、多分に推測を交えながらではあるが述べてきた。明治山が当初の築山の意図から変換し、

近代日本人にとって劇的な体験である日露戦争を経ることによって旅順を模した存在となり、そこに建てられた戦争記念碑には、これも日露戦争の象徴的存在であった乃木の揮毫を配することによって、戦没者の慰霊空間としての蓋然性を高めていったのではないかと推察した。

現在の明治山一帯は埋め立てにより完全に陸地化しており、往時の面影は皆無である。しかし、ほんの一世紀程前にそのような歴史があり、すでに忘れ去られているとしたならば、このような駄文でも地域の歴史を掘り起こすのに多少は役に立つかもしれないと思い、記した次第である。

註

- (1) 滋賀縣護国神社1997・長浜市2003に掲載されている写真では、碑の頂部に鳳凰の銅像が載せられている状況がわかる。長浜市史の記載によれば、すでにオブジェは欠失していたということであるが、それがいつなのか、どのような理由で欠失したのか、については今回判明し得なかった。
- (2) 笠井喬の前任者である伊藤紀（天保13（1842）年～大正3（1914）年）については、松室2008参照。彼らはともに滋賀県に出仕し、退職後は日吉神社宮司を勤めるなど明治・大正期の滋賀県の神社界において中心的人物であった。また兩人とも能書家でもあり、県内の社号標等への揮毫も多く行っている。
- なお、笠井・伊藤の略歴については日吉大社に残る『元職員履歴書』による。
- (3) 滋賀県内の戦争記念碑については平成9（1997）年に滋賀県護国神社によって集成がなされている。遺漏もあるが戦争記念碑について調査・研究を行う際には有益な資料である。それによれば県内の忠魂碑・忠霊塔・慰霊碑等の戦争記念碑は429基以上存在する（1997年段階）。うち、昭和20（1945）年8月までに建立されて残存しているものは185基、以降に建立されたものは236基存在する（時期不明8基）。ただし、調査報告書刊行以降に解体して新しい慰霊碑などに建て替えられた事例も確認しており（長浜市高月町高月および長浜市内保町にそれぞれ所在した忠霊塔等）、戦前期の戦争記念碑はその数を減らしていつているのが現状である。
- (4) 忠魂碑等の戦争記念碑建立の経緯について明らかとなる事例は、現時点では少ない。戦争記念碑そのものが歴史資料として取り扱われる機会がこれまで少なかったこともあり、地域史編纂の過程でも取り上げられてこなかったことが要因の一つとして挙げられよう。
- そのような中で米原市高番（建立当時は坂田郡春照村高番）の千福神社境内に所在する「明治卅七八年戦役記念碑」（明治44（1911）年3月建碑）については、地元にな木揮毫の経緯が記された文書及び揮毫の原本が保管されている。機を見て紹介したいが、今後はこのような地域に眠る史資料の掘り起こしが必要となろう。
- (5) 砲弾型の頂部を有する滋賀県下の戦争記念碑として、近江

八幡市安土町慈恩寺の浄厳院境内の忠魂碑がある。本事例は大正8（1919）年9月に建立、碑正面の揮毫は海軍大将上村彦之丞による。これも小高く自然石を積み上げた墳丘上に碑を設置している。砲弾型忠魂碑のすべてが旅順を想起させるもの、あるいは激戦地を模したものではないだろうが（すでに日清戦争以後に建てられた戦争記念碑に砲弾をデザインしたものは存在する。ここでは小丘とセットという意味で使用している）、砲弾型の碑を設置する場所を小高く盛り上げるといふ、いわば一つの様式が日露戦争以後に定式化しているとしたら興味深い。今後個別の事例検討を重ねて詳述したい。

文 献（著者名・刊行機関50音順、刊行年順）

- 石川哲三（1985）『改訂 杉浦重剛の生涯 生誕130年記念』
大濱徹也（2010）『乃木希典』講談社学術文庫
小川白楊（1912）『行幸二十五年慶雲館建碑式記念写真帖』
佐々木英昭（2005）『乃木希典—予は諸君の子弟を殺したり—』
ミネルヴァ書房
滋賀縣護國神社（1997）『終戦五十周年記念 滋賀県内忠魂碑・慰
霊碑等調査集』
滋賀県坂田郡教育会（1942）『改訂近江国坂田郡志』第四巻（1971
年再版）
地図資料編纂会編（2003）『正式二万分一地形図集成 中部日本

3』柏書房

- 長浜市（2003）『長浜市史第7巻 地域文化財』長浜市史編さん
委員会
長浜市教育委員会歴史文化課・財団法人滋賀県文化財保護協会
（2006）『慶雲館庭園 復元的整備事業に伴う発掘調査報告書』
羽賀祥二（1998）「日清戦争記念碑考」『名古屋大学文学部研究論
集（史学44）』
藤井忠俊（2009）『在郷軍人会—良兵良民から赤紙・玉碎へ』岩波
書店
松室孝樹（2008）「記念碑から地域の歴史を考える—神社社号標
を題材として—」『史想』第23号、京都教育大学考古学研究会
松室孝樹（2010）「ランドマークとしての神社社号標—滋賀県を
フィールドとして」『近江の文化と伝統』同編集委員会

挿図・表・写真典拠

- 図1 明治27年大日本帝国陸地測量部作成のものを使用。地図資
料編纂会編（2003）。
表1 滋賀縣護國神社1997から引用、一部追加。
写真1～9・11～15 松室撮影。
写真10 小川（1912）から転載。

（まつむろ たかき：企画調査課 主任）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.25 2012.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage